

肢の脱力と感覚障害を認めたため、当院整形外科へコンサルトした。MRIにてC5~Th3に及ぶ急性硬膜外血腫と診断され(図2a,b), 同日、緊急血腫除去術が施行された。(図3a,b,c)。術前に上肢まで麻痺の進展が認められていたが、血腫除去と術後のリハビリテーションにて両側上肢運動は回復が認められた。両下肢については自動運動不能で、平成19年2月6日車椅子全介助レベルで転院となった。

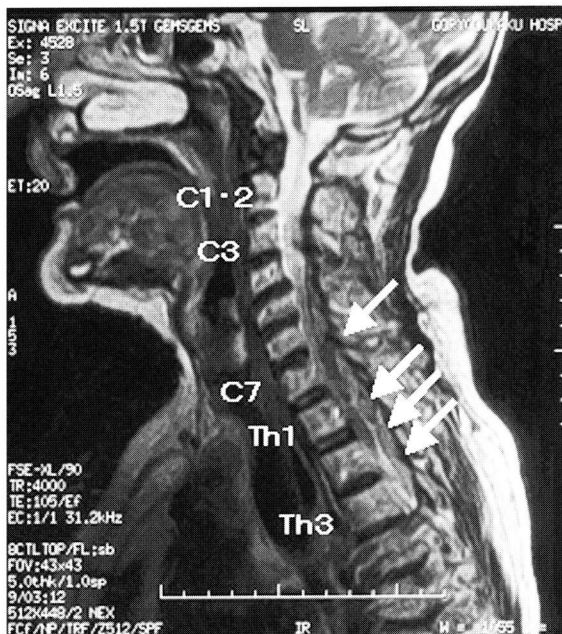


図2a: MRI T2WI sagittal像. C5~Th3に及ぶ低信号~比較的高信号の混在した占拠性病変を認める。



図2b: MRI T2WI axial像. 脊髄背側に占拠性病変を認める。

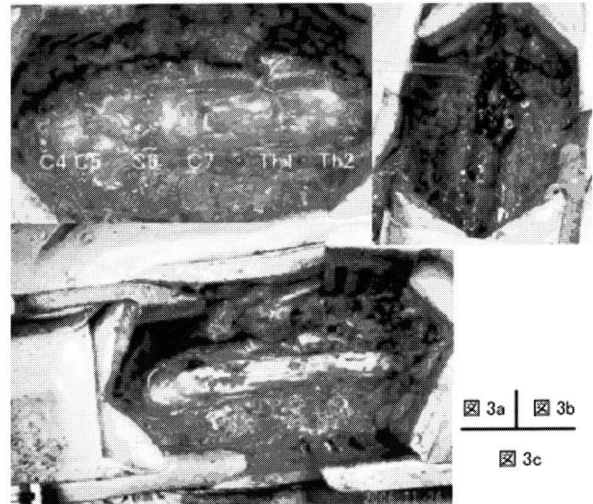


図3a, b: C4~Th3椎弓切除及び血腫除去術中所見。大量の血腫を認める。

図3c: 血腫除去により脊髄への圧迫が解除された。

考 察

脊髄硬膜外血腫は1869年にJacksonが脊髄出血の一例として初めて報告し¹⁾, その後も稀な疾患として報告されてきた。背部痛や根性痛, 運動麻痺の突然発症などが特徴的所見とされ, 好発年齢は60~70歳代, 頻度は0.1人/10万人/年程度とされている²⁾。その原因として, 硬膜外穿刺, 背部外傷などの外傷性的ものと, 特発性や易出血性などの非外傷性に分けられる。国内報告131例の内訳は, 特発性100例, 外傷性7例, 抗凝固療法23例, 出血傾向(肝硬変・血友病)5例, 血管異常1例, 分娩1例であった³⁾。脊髄硬膜外静脈叢を形成する静脈は弁を欠いているため, 軽微な静脈圧の上昇により容易に破綻することが特発性の発症機序として推定されている^{4) 5)}。

治療法としては早期の血腫除去術が必須と考えられてきたが, MRIの普及により早期診断が可能になるにつれ, 保存療法による回復例も次第に報告されてきている。早期血腫除去術の適応として, 北原らや宮下らは『麻痺が進行し回復傾向を認めない症例』とし^{6) 7)}, 福内らは『凝固異常のある症例は血腫が吸収されにくく自然治癒しづらいため, 早期の血腫除去が必要』としている⁸⁾。手術により改善の期待ができる時期は12-48時間以内と一定していない(村田ら⁹⁾, Groenら¹⁰⁾)。本症例においては, ワーファリン使用患者でINRが延長しており, 麻痺の出現後8時間ほどで血腫

除去術が行われたにもかかわらず、下肢の完全麻痺が残存する結果となった。

近年、脳塞栓症予防のため、循環器、脳外科領域を中心に高齢者に抗凝固薬が頻用されているが、本症例のような特殊な出血性合併症をきたした場合、診断の遅れにより、脳塞栓症より重度の麻痺が後遺症として残る可能性もある。またこのような症例に遭遇した場合、頭蓋内出血を伴わない四肢の神経症状から、脳梗塞を疑い、安易に抗凝固剤を使用すると不可逆的な運動障害を残しかねない。ワーファリン使用患者においては、突発的な頸部、背部痛を認めた場合、特徴的な病歴・身体所見から本症を疑い、MRIを積極的に用いることで、早期診断・治療にあたるのが肝要と考えられた。

文 献

- 1) Jackson R: Case of spinal apoplexy. *Lancet* II 5-6, 1869
- 2) Holtas S, Heiling M et al.: Spontaneous spinal epidural hematoma: findings at MR imaging and clinical correlation. *Radiology* 199: 409-413, 1996
- 3) 前原 秀二 他: 抗凝固療法中に発症した急性脊髄硬膜外血腫. *日本脊髄障害医学会雑誌* 19: 38-39, 2006
- 4) Kaplan LI, Denker PG: Acute nontraumatic spinal epidural hemorrhage. *Am J Surg* 78: 356-361, 1949
- 5) Cooper DW: Spontaneous cervical epidural hemorrhage. *Neurosurgery* 61: 143-148, 1984
- 6) 北原 建彰 他: 特発性脊髄硬膜外血腫の3例. *東日本整災会誌* 13-3: 323, 2001
- 7) 宮下 智大 他: 急性脊髄硬膜外血腫9例の検討. *整形外科* 56: 1287-1292, 2005
- 8) 福内 正義 他: 抗凝固剤投与中に発症した脊髄硬膜外血腫の2治験例. *昭和医会誌* 62: 66-71, 2002
- 9) 村田 高 他: 保存療法で治癒した急性脊髄硬膜外血腫の1例. *整形外科* 50: 1445-1448, 1999
- 10) Groen RJM: Operative treatment of spontaneous spinal epidural hematoma; a study of the factors determining postoperative outcome. *Neurosurgery*. 39: 495-509, 1996